

関西日中関係学会総会／講演会（平成29年4月22日）

弁護士坂和章平による

「坂和的日中交流の楽しみ方と坂和的中国電影論」の講演要旨

<はじめに、自己紹介>

今日は、「坂和的日中交流の楽しみ方と坂和的中国電影論」と題したとおり、ややもすれば堅い内容が多かった従来の日中関係学会の講演とは少し色合いの異なるソフトな話をしたい。

1949年1月	愛媛県松山市に生まれる	1974年4月	弁護士登録（大阪弁護士会）
1971年3月	大阪大学法学部卒業	1979年7月	坂和章平法律事務所開設
1972年4月	司法修習生（26期）	（後 坂和総合法律事務所に改称）	現在に至る

1974年以降、約10年間は、公害問題に取り組み、1984年から今日までは都市問題、とりわけ都市再開発問題をライフワークにしてきた。今日、講演している大阪駅前第一ビルは大阪駅前再開発事業で完成した市施行の事業だが、問題が多い。他方、2001年から映画評論家活動と日中交流に、組織としてではなく、個人的に楽しみながら取り組んでいる。

<坂和的日中交流の楽しみ方>

第1. 留学生との交流が坂和的日中交流の始まり

①00年8月、大連旅行→大連からの留学生との交流、②01年8月、西安旅行→西安からの留学生との交流、その後、③毛丹青氏との交流。

第2. 毛丹青氏との交流

1. 08年当時10冊以上の著書を持ち、800万人のアクセスがあるブログをもつ、日本在住20年のバイリンガル作家が1962年北京生まれの毛丹青氏。08年3月に友人の紹介でそんな有名作家と出会った。个性的で濃いキャラ(?)を互いに嗅ぎつけあい、書くことが大好きという共通点でたちまち大の親友に。
2. 最初のイベントは、①08年4月2日開催の「中国の人気作家蘇童が行く関西の旅歓迎座談会」。その懇親会で私は弁護士稼業との2足のわらじをはく映画評論家として紹介され、『シネマルーム5』を配布。その後出版、講演会、ブックフェア等々、2人の共同作業は広がり莫言との対談も！その後、②『取景中国』出版と、上海ブックフェア（09年8月18日）、③大学での対談・共同講演あれこれとCCTVデビュー！（09年10月11日）、④定遠号プロジェクト（10年3月15日）

第3. ノーベル文学賞・莫言との対談と有馬温泉での温泉談義

1. 2011年7月26日、アジアで最もノーベル文学賞に近い中国人作家と言われている莫言との対談が実現した。読売新聞による公式の日本訪問の合間にこれを企画したのは、神戸国際大学教授の毛丹青氏。①坂和総合法律事務所での午前中の公式対談、②大阪天満宮の斜め向かいで、日本初のノーベル文学賞作家川端康成生誕の地にある料亭・相生楼での昼食会、③超豪華なリゾートホテル・エクシブ有馬離宮にゆっくり一泊し、夕食時はもちろん、莫言の大好きな温泉に浸かっての温泉談義(?)の3つ。
2. 企画が決まった後、坂和は急遽“文学おじさん”に変身！莫言原作の映画は『紅いコーリャン』（87年）、『至福のとき』（02年）、『故郷の香り』（03年）の3本を観て評論していたが、原作本は読んでなかったため直ちに莫言の著書を買って求め、まずは最新作『蛙鳴』を家系図を作成しながら読破。続いて『赤い高粱』、『白檀の刑』上下、

『築路』とメモを作りながら読み進んだが、『転生夢現』上下と『四十一炮』上下は残念ながら途中まで。しかし猛勉強の甲斐あって、直前には各種のレジメと資料が完成。頭の中が莫言作品一色となった状態で対談に。

3. 1955年に山東省高密県の農村で8人兄弟の末っ子として生まれた莫言の子供時代は、飢えと孤独がテーマ。中農だった莫言一家は1966年から77年まで続いた文化大革命の中で苦しい思いを。76年に人民解放軍に入った莫言は85年から作家活動を開始。張藝謀監督の『紅いコーリャン』によって、一躍莫言の名前も世界中に知れ渡った。その後次々と続く大作の発表に世界はビックリ！そんな莫言との対談は①坂和の莫言作品に対する評価や質問に始まり、②坂和的中国電影評価、③日中文学作品評価④作家と弁護士との感性の異同、⑤毛丹青氏を含めた3人が生きてきた日中の時代変遷の中での問題意識のあり方、等々多岐に及んだ。
4. 夜の有馬離宮での話題の中心は、①7月23日に中国の温州で起きた高速鉄道脱線事故の報道、②その賠償処理についての弁護士としての坂和の見解、となった。

＜映画化された莫言文学（坂和評論）＞

1. 『紅いコーリャン（紅高粱）』（シネマ⑤72頁）
1988年第38回ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞し、『紅いコーリャン現象』をひきおこした、張藝謀の第1回監督作品。タイトルどおりの赤を基調とした色彩美とコーリャン畑、コーリャン酒を生かしたストーリー構成は出色！日本軍の出現が悲劇的な結末を生み出す衝撃的な作品だが、「中国の山口百恵」と呼ばれた鞏俐を見出したことにも、この映画の大きな意義が…。
2. 『至福のとき（幸福時光）』（シネマ⑤199頁）
急速に近代化が進むまち大連。そしてこのまちでリストラされ結婚もできない負け組の中年男。そんな中年男と盲目の美少女との間で展開される何とも荒唐無稽な「騙し合い」。しかしそこには本物の心が。そして善意の仲間たちに囲まれて過ごす「至福のとき」が。張藝謀監督の「しあわせ3部作」の完結編はホントに最高。
3. 『故郷の香り（暖）』（霍建起監督）（原作『白い犬とブランコ』）（シネマ⑩264頁）
「どうしても観たい映画」がある。タイトルと監督の名前とスチール写真を見ただけで「これは！」と思ってしまう映画。それがこれ！「ふるさと」「10年後」「初恋の女性」—ありふれた題材だが、それをホントに感動的に描くことができるのは、中国の、それもごく一部の監督しかいないだろう。オーバーラップしながら静かに流れていく10年前のストーリーと現在の姿……。今更どうしようもないことはわかりながらも、いやそうだからこそ、やはり感動！映画ってホントにすごい芸術だと思わされてしまうこの名作は超お薦めだ！

第4. 毛丹青氏を主幹とする『知日』と『在日本』の出版

1. 09年8月30日 政権交代 12年9月11日 尖閣諸島国有化 →日中関係悪化
⇒この時こそチャンス。反日でも親日でもない「知日」を雑誌にして大ヒット。
2. 『知日』の大ヒットを受けて、2016年から卒業生の李淵博クンを社長、毛丹青氏を主幹として『在日本』を出版。これは、中国人留学生の目を見た日本を等身大で、そのまま中国に発信するもの。

第5. 北京電影学院での特別講義（07年10月10日）

1. 北京電影学院は、中国第5世代監督の張藝謀や陳凱歌らを輩出した世界でも珍しい国立の総合映画大学の最高峰。そこで学ぶ約50名の院生を前に、2時間半の「坂和的中国電影論」を。
2. 10月9日の打合せと昼食会そして学院内の見学を経て、翌10日、学院内には「日本著名電影評論家坂和章平談 中国電影在日本」と書かれた私の顔写真入りの大きなポスターが。うれし恥ずかしの気持ちいっぱい45分前に教室に入ったところ、既に最前列の席をキープする約10名の院生がいた。配布した授業のネタは中国語版レ

ジメ 4 枚だけだが、私の手元には膨大な資料が。ちなみに、当日は朝 4 時半に起きて、ホテルの部屋で講義メモをバッチリ作成。

3. 授業終了後は『SHOW-HEY シネマルーム』の中国語版はないのか?」をはじめとする質問が次々と。私の講義に対する院生たちの興味と関心の強さを実感!

第 6. 北京電影学院“实验电影”学院賞の発足と授賞式 (15 年 6 月 29 日)

<北京電影学院“实验电影”学院賞の発足と授賞式>

北京電影学院“实验电影”学院賞の発足 (人の縁の積み重ね) (2007 年~2014 年)

- (1) 坂和による北京電影学院での集中講義『坂和的中国電影論』(2007 年 10 月 10 日)
- (2) それから 7 年。北京電影学院を卒業し、早稲田大学に留学中だった劉教授の娘である劉茜懿さんからの連絡により、2014 年 7 月 30 日、劉教授、刘晓清教授、霍廷霄教授 (張芸謀監督の映画で美術デザインを担当) たちが、私の事務所と自宅を訪問。机の上に並ぶ、『シネマルーム』1~32 を中心とした書籍を話題に、事務所での公式対談は有意義なものになった。続く、会場を自宅マンションに移しての夕食会では、中国映画の話しが盛りあがる中で、大いに飲みかつ食べながら、3 人の教授たちが北京電影学院聯合作業卒業制作プロジェクト坂和章平賞の設置を提案。坂和を主席スポンサーとして、同賞を発足させる話し合いがされた。
- (3) 北京電影学院内での協議が進み、坂和と北京電影学院との間で北京電影学院学生総合映画製作作業新視覚賞に関する協定書を締結 (2014 年 11 月)。その内容は次のとおり。
 - ① 坂和は北京電影学院の青年映画芸術を発展させることを目的として、「独自の創作を奨励し、かつ、当該創作に係る著作権その他の権利を保護し、海賊版の跳梁を許さない」活動の首席スポンサーに就任 (3 年間)。
 - ② 坂和は首席スポンサーとして、年間 100 万円を寄付し、イベント等に参加する。
 - ③ 北京電影学院は、学生の映画製作を奨励する「新視覚賞」を創設し、毎年 10 月以降、3、4 年生と院生が製作する映画から受賞者を決定する。
 - ④ 坂和は毎年 5 月頃に開催する、新視覚賞授与式に参加し、その年度の寄付金 100 万円全額を賞金として授与し、坂和章平の称号を記載した表彰状を授与する。
- (4) 北京電影学院“实验电影”学院賞の決定と授賞式への参加決定 (2015 年 6 月)

第 7. 劉茜懿初監督作品『鑑真に尋ねよ』

2014 年 9 月 6 日、私のセッティングによって、東京での北京電影学院卒の劉茜懿さん、北京電影学院客員教授・古澤敏文氏、日本人留学生・安藤直子さんの再会を実現。そこには、中国人の友人たちが次々と集まり、盛大な情報交換会になった。その席で、劉茜懿から初監督作品『鑑真に尋ねよ』の製作発表が行われる中、私は直ちに 500 万円の出資を発表した。「四小名旦 (中国四大美女)」の一人で、北京電影学院卒の趙薇が、大学院の卒業製作作品として初監督した『So Young~過ぎ去りし青春に捧ぐ~ (致我們終將逝去的青春)』は第 22 回上海映画批評家大賞の最優秀新人監督賞等を受賞し、日本でも好評だった。『鑑真に尋ねよ』の公開は予定より大幅に遅れているが、その成功を期待したい。

<坂和的中国電影論>

第 1. 私と映画、そして映画評論

1. 私と映画

- (1) 小学時代 (1955~61 年) — 東映チャンバラ映画、『にあんちゃん』(59 年)
- (2) 中学・高校時代 (1961~67 年)
・ 3 本立て 55 円 (洋画+日活) ・ 学校推薦 (『ベン・ハー』など) ・ 試写会時々
- (3) 大学時代 (1967~71 年)
・ 時々、名画座系 (3 本立て 150 円?) ・ 日活ロマンポルノ
- (4) 司法修習生 (1972~74 年) — 深夜映画+ビデオ数台 (年末年始)
- (5) 超多忙時代 (1974 年からずっと) — 深夜映画+ビデオ数台 (年末年始)

- (6) 自社ビル移転、ホームページ開設 (2000～17年)
- ・映画評論執筆開始—試写室通い、
 - ・年間多い時は300本、現在180本、『シネマ1～38』出版
 - ・『シネマルーム5』—中国映画66本、『シネマルーム17』—中国映画83本、『シネマルーム34』—中国映画90本
- (7) 映画検定—キネマ旬報社・キネマ旬報映画総合研究所主催
- ・『「映画検定」公式テキストブック』 ・『「映画検定」公式問題集』
 - ・4級合格 (06年7月)、3級合格 (07年1月)

2. 私の1本・私のベスト5 (2008年時点)

- (1) 私の1本—『サウンド・オブ・ミュージック』(高3)
- (2) 私のベスト5

洋画

- ①『風と共に去りぬ』(39年)
- ②『ウエスト・サイド物語』(61年)
- ③『卒業』(67年)
- ④『太陽がいっぱい』(59年)
- ⑤『さらば、わが愛／霸王別姫』(93年)

邦画

- ①『砂の器』(74年)
- ②『幸福の黄色いハンカチ』(77年)
- ③『人間の條件』(59～61年)
- ④『蒲田行進曲』(82年)
- ⑤『敦煌』(88年)

3. 私の愛読書

- (1) 昔『スクリーン』『映画の友』、近時『週刊20世紀シネマ館』『キネマ旬報』
- (2) 参考書：『中国映画の明星』
『中国映画の明星—女優編』(石子順・03年・平凡社)
- (3) 私の夢『坂和流シネマと法律』の出版

4. 坂和的映画論

- (1) なぜ映画が面白いのか？—①人間の本性に迫る、②人生の縮図、③知らないことを体験、④歴史や恋愛の勉強、⑤夢と希望、元気の素
- (2) なぜ映画評論を書くか—①書かないと忘れる、②書くことによって感動を記録、③他者との議論のネタ、④読者にも夢と希望と元気を与える
- (3) 何が好きか？—①人それぞれ、②必ず好きなジャンルあり
- (4) 映画評論の何が面白いのか？—①映画の話題は老若男女に共通、②人間の本音に早く迫れる。本性が早く見れる、③異なる意見、見方、感性を知る。
- (5) こだわりがわかる！—①私のこだわりは？、②あなたのこだわりは？、③面白い人がたくさん・・・

5. 私の映画評論の特徴 (ユニーク性)

- (1) 弁護士の視点
- ①法廷のあり方 ②各種の法律上のテーマ ③その他 (危機管理のシステム)
- (2) 都市法政策の講義、都市問題の実践からみる視点
- ①都市・住宅政策、②公害、③歴史大好き人間の視点—中国、韓国、ヨーロッパ中世、④文学大好き—シェイクスピア、⑤戦争映画検討の視点、⑥日本人論追及の視点 (西欧や中国との対比)、⑦恋愛大好き、ピュアな少年の視点 (?), ⑧エロおやじの視点、⑨時事問題検討の視点

第2. 中国の近現代史

1. 清の時代、植民地支配の時代—『阿片戦争』(97年)
日清戦争(1894~95年)、日露戦争(1904~05年)
2. 孫文の時代—『宋家の三姉妹』(97年)
辛亥革命
1905年8月 「中国同盟会」発足
1912年1月1日 孫文を臨時大總統に選出 →革命政府樹立
3. 日中戦争(抗日戦争)の時代(1937~45年)
4. 国共内紛時代(1945~49年)
5. 新中国建設(1949年~)
(1)文化大革命—下放政策(1966~76年) (2)北京電影学院再開(1978年)
(3)改革開放政策(1978年~) (4)天安門事件(1989年)
6. 歴代政権(権力の承継)—毛沢東(1949年~)→鄧小平(1978年~)→江沢民(1989年~)→胡錦濤(2003年~)→習近平(第1期2013年~、第2期2018年~)

第3. 中国電影 100年

1. 中国映画の発祥
1905年—ドキュメンタリー映画上映 京劇の演目『定軍山』を記録したもの
それから100年「中国映画博物館」建設(2006年)
2. 1931年9月17日(満州事変)~1945年8月15日(日本敗戦)まで
反日・抗日映画のオンパレード
3. 1945年8月15日(日本敗戦)以降 →満州映画協会の崩壊と東北電影の設立
・理事長 甘粕正彦 ・大スター 李香蘭
4. 文化大革命(1967年~77年)と北京電影学院の再開(1978年)、第1期生の活躍(1984年~)
5. 日中国交回復と中国映画の日本への導入
(1)日中国交回復(1972年9月29日)—田中角栄+周恩来
(2)①第1回中国映画祭(1978年)、②中国映画祭(1988年)—榊徳間書店東光徳間事業部→第5世代監督の映画紹介、③中国映画祭(1995年、1997年、2000年)、④中国映画の全貌(2004年)
6. 1997年香港返還
(1)返還までの香港映画—香港は全く別、イギリス圏→活発
(2)返還以降の香港映画→合流
(3)10年を経過した2007年の香港映画→『インファナル・アフェア』3部作
(4)香港映画が果たした役割—1990年代初頭から名作続出
7. 台湾をめぐる情勢
(1)国共対立(1945~49年)
(2)2・28事件(1947年2月28日)
『悲情城市』(89年)→戦後中国から台湾に渡ってきた外省人である国民党が、戦前から台湾に住んでいた住民(本省人)たちの抗議運動に対して武力で弾圧した。
(3)蒋介石台湾へ(1949年12月)
(4)国民党VS民政党—2つの中国をどう考える?

台湾の独立問題

(5) 2015年11月7日中国共産党習近平 VS 中華民国（台湾）馬英九総統の歴史的会談（1949年の分断後をはじめ）（民進党の次期総統蔡英文は猛反発）

(6) 台湾映画の果たした役割

第4 第5世代監督の果たした役割（特に張藝謀と陳凱歌）

1. 第5世代監督以前の監督たち

2. 北京電影学院の果たした役割

3. チャイニーズ・ニューウェーブの特徴と歴史的意義（1984年～）

(1) 中国独自の文化、力強さ

①張藝謀監督『紅いコーリャン』『紅夢』『菊豆』、②陳凱歌監督『黄色い大地』

(2) 中国の歴史（古代、近代史）

①張藝謀監督『活きる』、②陳凱歌監督『始皇帝暗殺』『さらば、わが愛／霸王別姫』

4. ハリウッド進出の功罪

・張藝謀監督—『HERO（英雄）』『LOVERS（十面埋伏）』

・陳凱歌監督—『黄色い大地』『大閱兵』『子供たちの王様』『さらば、わが愛／霸王別姫』『始皇帝暗殺』『キリング・ミー・ソフトリー』『北京ヴァイオリン』『PROMISE』『花の生涯～梅欄芳～』『運命の子』

5. 田壮壮監督の独自路線は？—『狩り場の掟』『盗馬賊』『青い凧』『春の惑い』『吳清源 極みの棋譜』

6. 霍建起監督の独自路線は？—『山の郵便配達』『故郷の香り』『シヨンヤンの酒家』

第5 第6世代監督の果たしている役割

1. 第6世代監督の意義—第5世代監督との違い

2. 第6世代監督とその作品

①賈樟柯—『一瞬の夢』『プラットホーム』『青の稲妻』『世界』『長江哀歌』『四川のうた』『罪の手ざわり』『山河ノスタルジア』、②張楊—『胡同（フートン）のひまわり』『ゴォさんの仮装大賞』、③張元—『小さな赤い花』『緑茶』『我愛你』、④婁燁—『ふたりの人魚』『パープル・バタフライ』『天安門、恋人たち』『スプリング・フィーバー』『パリ、ただよう花』『二重生活』『ブラインド・マッサージ』、⑤王兵—『鉄西区』『無言歌』『三姉妹～雲南の子』『収容病棟』

3. 第6世代監督の映画祭受賞と検閲

第6. 第6世代監督以降の監督たち

趙薇監督—『So Young～過ぎ去りし青春に捧ぐ～（致我們終將逝去的青春）』

第7. 中国映画にみる論点（坂和の問題提起）

①文化大革命をどう考える？、②下放政策をどう考える？、③中国土地バブルをどう考える？、④都市問題—再開発をどう考える？、⑤民族問題をどう考える？、⑥ドキュメンタリー映画をどう考える？、⑦日中戦争をどう考える？、⑧メディアの管理体制と検閲をどう考える？、⑨張芸謀監督たちの近時の中国映画のハリウッド進出と、逆にハリウッドの中国へのご機嫌取り（？）（＝資金提供の狙いと市場狙い）をどう考える？⇒『グレートウォール（長城）』—マット・デイモンを起用、⑩『ゼロ・グラビティ』『インデペンデンス・デイ リサージェンシ』『オデッセイ』—中国人の美人パイロットを起用